

一般の部

入賞

広島県知事賞

父と

福山市 高垣 亜矢

病院に行く父を車に乗せる
こぶしを握った手を膝に置いて
前を向いたまま動かない
写真屋のお客さんみたい
はい締めますよ
パチン

父が乗るカブのうしろにまたがり
書道教室や写生大会に出かけた
ん、とあごをあげると
父の手が白いヘルメットをパチンと締める

カブを手放した日から

父は死の影に怯えだした

覚えてる？

父はわたしの誕生日を言った
病院へ行く日を何度も聞いた

けっこうな年齢になった娘に

「五十か、まあよかろう」と首を振った

振り落とした夢があつたことを

初めて聞いた

写生大会で描いた車の窓に

父とわたしを小さく入れた

迎えに来た父には見せなかった

そよぐシャツとたばこの匂い

横に走る二人の影を見ていた

広島県議会議長賞

命をつなぐ米

呉市 溝口 京子

米にまつわるニュースが
日々波のように打ち寄せてくる
「備蓄米、五キロ三千円」
数字が独り歩きする

胸が騒ぐ
子供時代の物語が私を呼ぶ

白く光る一粒一粒に命を見た
洗う時、一粒も流してはいけない
食べ残すとお茶碗から火が出て
二度と食べられなくなる

我が家の小さな田は宝物
父は牛とともに、土の匂いと声を聴く
母は粃を撒き、命を育てる
私の指先が、油紙を敷く作業を手伝う

命が顔を出すと、カエルの合唱が響く
オタマジャクシが水面に光り囁きあう
家族は腰をかがめて、綱の印に
明日の命をつなぐ

稲穂が実ると、鎌の音
汗と泥と、稲の重さが肩に響く
背中の痛みは、明日の命をつなぐ

あれから六十数年
田は広大になった
温室で苗は育つ
機械が明日の命をつなぐ

それでも、畔の草は、人の手で刈る
もう大豆は植えない

焼けた肌と汗が、黙々と今日も草を刈る
胸のどこかが熱くなる

風に揺れる稲穂が謳う

科学の力と農業者の知恵を生かせと
若い手に誇りをとす知恵を出せと

現 代 詩 部 門

広島県教育委員会賞

ゲンへの手紙

広島市 大澤 優子

どこかで出会ったあの裸足の少年は
いつも怒りを露^{あらわ}にしていた

（ヒロシマのことは知ってるけど知らない
ヒロシマのことは知らないけれど知ってる）

あなたは受難に遭^あいましたね

私はアメリカくんだりにまで出向いて

あなたのことをお話したのです

そこで何かを手に入れた気になっていましたが
スーツケースを開けたら

出てきたのは美しく輝く千羽鶴の束だけで

あなたからの手紙は

どこかで失くしてしまったようです

あの日あなたから託された宿題

あの残酷な爆弾が二度と使われないために
どうしたら良いか

私のノートは空白のまま時が経ち
とうとう八十年めの日を迎えてしまいました

漫画家となったあなたの眼の中の
強い光は今も忘れることができません

そうそう

それでも小さなコミュニティーセンターの
片隅には地元のアメリカ人の誰かが
用意してくれた私の資料のコピーの束が
置かれていました
アルファベットの文字の中に
あなたの顔が埋もれていたのです

その顔は笑っていたのに
それを読んだアメリカ人たちは
なぜか沈痛な表情を浮かべていました
あなたは今や

何十ヶ国語も話せるようになって
世界中を飛び回っているのですね

あなたの強さも勇気も持ち併わせてはいませんが

「まだまだ言い足りていないのだから」

一度だけインタビューした

あの漫画家の先生の言葉が

いつまでも胸に突き刺さって疼くのです

つたない言葉でしか綴れません
が

いつかまた

この手紙の続きを書きたいと思います

そのときは少しは良いことを

ご報告できればいいのですが。

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

骨

広島市 箭田 儀一

掘り起こされた土地に
白く、ひび割れた骨が埋もれている
雨が降るたびにその表面は
滑らかに湿り、
風が吹けば
細かく碎ける

この骨たちは語らない、
戦火の中で散り散りに消えていった
命の記憶も、
傷つけられた地面も、
すべてが無音であつた
ただ、あらゆるものを静かに残している
赤い空が燃えた時、
あらゆる生命が数えきれないほどの瞬間に
同時に消えた

だが、この白い骨のひとつひとつには
まだ、
死ぬことを決めた者たちの意志が
刻まれている

どんな兵士も、
どんな命も、
もはや戦争の記憶の中で
肉体を捨てた
ただ、
骨だけが、
時の隅で微動する

土の下で眠りながら、
その骨はまだ夢を見ている
破れた旗がなびく、
どこかで煙が立ち上がる
戦場の記憶が風とともに流れ
骨の中に、
そのすべてがまた戻る

銃声のない日々に

こうして、
静かに膝をついて
骨を拾い集める
だがその手は震えない
もう、
痛みを知ることはないのだから

無数の足音の中で
踏みしめられた場所に
ただひとつだけ
本当に残ったものがある
骨たちはただ
震えることなく、
ひっそりと、
時を待っている

広島市長賞

名月

西の空に
抱かれるように
歩いていた

透き通った色の
夕焼けは
想いを寄せる私に
別れを告げ
おだやかに沈んでいく
海の中へと

私はひとり
この海辺の街の
孤独の中に
残された

涼やかな風吹く

安芸郡海田町
竹野内康子

名月の晩

遠く離れた山間の

緑輝くふるさとに

黄金の稲穂は波打ち

彼岸花の群れは

畦道に揺れ

父はひとり静かに

病室に眠る

閉じた瞼に

月光は届いたのだろうか

微かな呼吸の中で

百回目の

この世の秋を

記憶したのだろうか

天に召される

最後の夜

神々しく

孤高を保つ

天空の球形

私はこの街の橋の上で
ひとり、その月を見ていたの、
お父ちゃん

現 代 詩 部 門

広島市議会議長賞

闇屋の源さん

庄原市 奥井 久子

米不足 備蓄米 古米

ふつと蘇る遠い日 闇米 闇屋

色黒でやせた体に大きなリュック

キラッと光る澄んだ瞳

終戦まもないわたしが小学四年生の頃

蟬の声と共にやってきた闇屋の源さん

リュックから手品みたいに出てくる品物

白い運動靴 白いゴムボール

海の魚の干物 いりこ 海苔……

お茶とたくあんを出す祖母

きまって二人の話が始まる

原爆で家族三人も失った源さん

ゆっくりと とつとつと

土間の上の煤けた黒い梁^{はり}を見上げて

話しだす源さん

正義の戦争だ 国に命を奉げよと
終戦 正義はひっくりかえった
ごまかしの正義で息子も母も死んだ
正しい戦争なんかない
死んでいい命なんてひとつもない

源さんの握りこぶしが震えていた
原爆で子どもを失った祖母
二人の目にキラリと光るものがあつた

急に話を変える源さん
「命はここ 大切にね。」
左胸を右手でポンとたたく
わたしも いつものようにまねして
「命はここ 大切にね。」
と源さんと笑い合う

米の売買は当時禁止
源さんは闇屋 警察に追われる人
でも源さんは言う
人間は柔^{やわ}じゃない 生きる術^{すべ}を探す
都会の人は米がない 田舎の人は物が

お金のかわりに米をもらう
その日わたしは ゴム草履を卒業
まっ白い運動靴を米で買ってもらった
その夜 うれしくて靴を抱いて寝た
少し干し魚のおいがした

彼岸花が畝道を赤く染める頃
急に姿を見せなくなった源さん

風のうわさ

矢野駅で警察の手入れ
闇米を線路に投げて飛び降りて大怪我

でも源さんは きつと元気になって
しっかりと残された家族を守っていると

原爆投下から八十年

蝉の声にまじって

「命はここ 大切にね。」

源さんの声が聞こえたような気がした

現 代 詩 部 門

広島市教育委員会賞

駅

広島市 正本 忠臣

頼まれて 2 番線ホームから電車に乗った
大きな駅で下りて

乗り換えるホームを探したけれど
どこにあるのか分からなかった

土産物売り場の若い女の人が

駅の隅まで連れて行ってくれた

柱の陰にあった長い階段を下りて行くと

電車が止まっていた

空^すいていて窓側に座れた

視界は白い壁で遮られていた

高いビルの間を走り抜けると 人家が続き

黄色や青や灰色の小さな屋根は

様々な方向を向いていた

踏切では遮断機が下りて警報機が鳴っていた

小高い丘が見えた 横に長い塀があつて

塀の上には長い屋根が架けられていた
畑が広がった 何かが植えられていた
時折川があつて
その度にそこで畑はいったん終わっていた

駅に着いた 屋根のある階段を上った
裏側の改札口の箱に切符を入れて外に出た
直ぐ道で 道の向こう側は

金網のフェンスで畑と仕切られていた
フェンスの下を茶色の猫が歩いていて

街まで歩いて行つた 家並の中を歩いた
お寺を過ぎた所は空地になつていて

その先に二階建てのアパートがあつた
通路を挟んで両側に部屋が並んでいた
3号室の隣は5号室で

板張りの戸をノックしてみた
返事はなかった

しばらく待ってみたけれど 会えなかった
アパートを出て お寺の境内に入つて
鐘撞き堂の石の縁に座つて休んだ
向こう側の縁を灰色の猫が歩いていて

アパートに戻ってみたけれど

人は帰っていなかった

街で食堂を探した

お金はテーブルの上に置いて出た

アパートの部屋に人のいる様子はなかった
待ったけれど 帰って来る人はいなかった

駅はもう薄暗くなっていた

階段を上り下って 電車に乗った

もう小高い丘の風景は見えなかった

大きな駅で13番ホームに上がった

電車が来たけれど でも乗らなかった

戻って 柱の陰にあった長い階段を下りた

電車は夜のビルの間を走り抜け

人家の上を通り過ぎた

外は暗くて もう何も見えなかった

所々 通り過ぎる白い電灯が眩しかった

現 代 詩 部 門

公益財団法人ひろしま文化振興財団理事長賞

こーちゃんとよーじ

広島市
清見久美子

玉つき屋の夫婦は忙しい
親戚の家に二人の息子を預けて仕事する
ある日おばあさんが二人の孫を連れに来て
久しぶりに家に戻った
八月五日だった

二人の息子は死んだ
玉つき屋の夫婦も死んだ
おばあさんは生き残り
おじいさんはおばあさんを責めた
どうして連れて帰ったかと
ずっとずっと責め続けた

おばあさんは二つの人形を並べて
拝んだ
その人形は男の子だった
焼き物で膝を立てて座っていた

かわいい顔をしていた
布で作ったちゃんこを着ていた
おばあさんはその人形の前に座り続けた
こーちゃん
よーじ
おばあさんは呼び続けた

桃

ほくは果樹園の暗い小屋に座し

野良着をはだけ

扉を少し開けて

桃がかすかに匂ってくる錯覚にとらわれている

どこか遠くから――

ほくは驟雨が過ぎるのを待っているのである

一夏の終わり――

樹間に造船所のクレーンがかすんで見える

離れ棲む系累を追うことを徒勞と決め

少しづつ罪に慣れていく日々

冬の陽だまりのような記憶のなかで

ほくはいくたび帰郷を試みたことか

比国から

海を歩いて帰ると便りをくれた父のように――

尾道市 仲尾 修

やがて暗くなる記憶の淵に
ぼくよりもはるかに若い
軍服の父が立つとき
ぼくの記憶はそこから茫漠となっていくのである
いつも――

あの日

冬の戸を閉めながら

弟は

「生きゆくはつねにさびし」と言ったのである

その後 ぼくは

弟のアドレスを知らない

楽しさ運ぶ鈍行列車

三次市 立田 幸子

眩しい朝日の抱擁の中
元気に目覚めた 今日へ
銀の鈴の音^なひびかせて
感謝の祈りを

好きな事だけ
好きな物だけ

それが許される今

八十路越えて
鈍行列車は動く
乗車して知る 喜びの数々
年と共に
広くなった 心の部屋には
宝物の健康が
楽しさ求めての 旅へと動き出す

車窓に広がる 見慣れぬ景色を
色褪せて行く思い出あとに

未知の世界へと

いざなうスマホ手に

楽しさ運ぶ鈍行列車は

今日も

広野を走る

夜の訪問者

東広島市 高橋 克知

その夜 ベランダに
サン・テグジュペリが
ひっそり降りていた

鈴の音の転がる空の
月灯りに照らされて
砂漠は 湖のように白かった

緑の服を着て
彼のとなりに座る
マツチを擦って
暖をとる

夢のなかにも 風が吹く
乾いた砂がこぼれ
地平線をながれていく
リンドバーグも カンパネルラも

今日は 深く 眠っている

彼がノートをひらいた
星座のスケッチ 羊の絵
そのかたわらに
薔薇や キツネたちの言葉が
ならんでいた

聞きたいことは
たくさんあった

それなのに 砂は もう
指から すりぬけていて

マッチを もういちど 擦った
頬の輪郭が 灯りのむこうに
ほやっと 浮かんでいた
目がさめるまで 彼を
よく 見ておきたい

パノマトペ

廿日市市
野田友里恵

桜が舞い踊る日
川に落ちた花を眺めるのは好きだ
水の透明と光に当たって反射する白が
何度もピンクをまじえて通り過ぎていく
どこからきたのか
赤や黄色も少し紛れて水と踊る
はらり、ぴとん。さらさら、ぴちゅん
また一枚、水と出会う音
美しい景色をつくる音

五月雨が鳴く日
雨音を聞きながら眠るまでの時間は好きだ
暗い部屋の中
布団と薄いブランケットに挟まれ閉ざれ
小さな世界で一人きりになったよう
そんな感覚の中、私に興味なさげな態度で
静かに寄り添うような音

さらさら、ぱたっ、ぽつり、ぴちゃん
今日の私を眠りに包んで過去へ送る音

木の葉が自由を知る日

落ち葉が土と暮らす道は好きだ

茶に染まった葉が地面と転がり遊びこける

少しの黄色や赤も混ざり

ただの土道ではないことを主張する

さく、ぱきん、かさかさ、くしゃり

子どもも大人もやっぱり好きで

少しうずうずしてしまふ音

木々が作り出すおもちゃの音

白い息が空に溶ける日

雪が傘にあたる音は好きだ

雨粒では出せない違う音

氷に水が混じりそうな、その両方の音

カサッ、パサッ、トン……………

タ、タ、タタ……タッ

静かに、でも悲しくないように

ほんの少しだけあたたかな音

家の中には得られない

雪と共に過ごした証明の音

ふと気が向いた日

ものを書く私が好きだ

自分の感性と、感情と

目の前の言葉と話し合うように

次の言葉を紡いでいく

ひとつの文字、単語、文章に向き合って

音を奏でるように、編み物を編むように

トン、さらさら、さり、さり、しゅっ

紙に文字がえがかれていく

一步一步を私のこの手で

歩くように、泳ぐように

掘るように、掬うように

飛ぶように、踊るように

言葉を繋いでいく音

私の世界が

またひとつ出来上がった